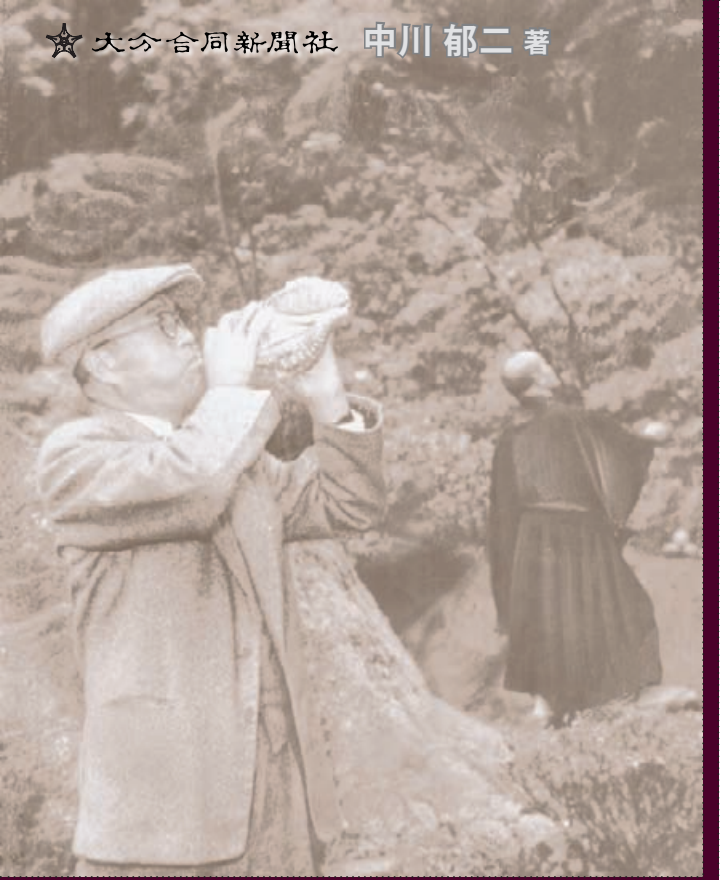
大分合同新聞社

中川 郁二 著



ロマンを追って

元大分市長 上田 保 物語

オオイタ デジタルブック DITA DIGITAL BOOK

デジタル版初版発行：2008 年 5 月 9 日

Next

第九章「条件反射」

第九章●「条件反射」

- 高崎山のサル
- 京大グループの生態調査
- コイ集めがヒントに
- 大西和尚に協力要請
- えづけ開始
- 初代ボスザル、ジュピター
- 観光名所の誕生
- 万寿寺と協議
- 「ただいま零匹」
- 天皇、皇后両陛下を歓迎

※奥付け／デジタルブックについて

●書籍案内

「ロマンを追って
—元大分市長上田保物語—」

著者：中川 郁二

A5 版 194 ページ

発行：大分合同新聞社

発行日：2003 年 2 月 15 日

定価：1600 円（税込み）

購入問合：その他の大分合同新聞社の本については、大分合同新聞文化センターへ
TEL：097-538-9662 「合同新聞の本」Web ページ

発刊に当たって

▽月刊誌「ミックス」（大分合同新聞社発行）で連載した「政治は創造なり・元大分市長上田保物語」（2001 年 5 月号～ 2002 年 4 月号）に若干手直しを加え、改題して 2003 年 2 月に書籍「ロマンを追って—元大分市長上田保物語—」を発刊。その書籍をデジタル化したのが、今回のデジタルブックです。　（本書に登場する人物の年齢や肩書き、施設名称等は、「ミックス」連載時点のもの）

第九章「条件反射」

高崎山のサル

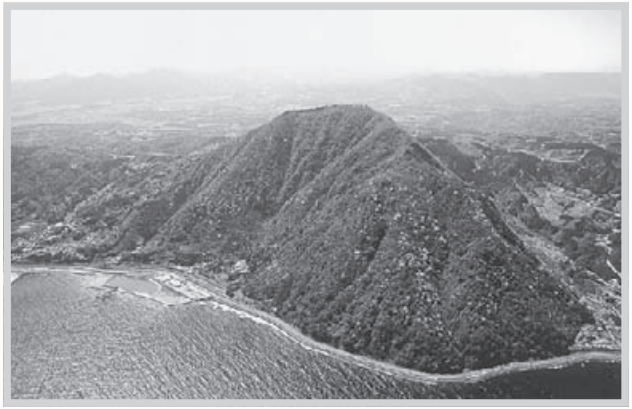
別府湾に面して孤立したように屹（そばだ）っている高崎山は、標高六二八・四メートル。山の南側（背後）は急勾配の斜面になだらかな丘陵が続き、背の低い灌木林で覆われている。海に面した斜面はクスノキ、カシ類、ツバキなどの常緑広葉樹と、ヤマザクラ、ムクノキ、ナラなどの落葉樹が密生し、この一帯の森林に野生のニホンザルが生息している。

この高崎山の野生ザルが古文書に初めて登場するのは、元和六年（一六二〇）前後に府内の戸倉貞則という人物が著した「豊府紀門」である。

それによると、「高崎山には昔から猿が多い。この国では、俗に人の子の器量のよくないもののことを〝高崎の息〟といっている」とある。

元禄七年（一六九四）、豊後を訪れた貝原益軒は「豊国紀行」の中で高崎山を取り上げているが、野生ザルについては全く触れていない。当時は数が少なく、人里に現れる野生ザルがほとんどいなかったせいであろう。

その後は、明治時代に四国方面から猟師が高崎山に


野生ザルが生息する高崎山

やってきて、サル狩りをしたことが記録に残っているぐらいで、野生ザルの存在は山麓に住む人たちが知っているにすぎなかった。昭和に入り、高崎山頂上の城跡などを訪れる人が増えるにつれ、灌木に群れをなしている野生ザルが目撃されるようになる。

戦後の食糧難がピークに達していた昭和二十二年(一九四五)、高崎山山麓に植わっているビワやイモ、野菜類に野生ザルによる被害が出始めた。ちょうど食糧増産運動期間とかち合ったため、大分署(当時)は有害鳥獣捕獲許可証を大量に発行して〝サル退治〟を奨励する騒ぎにまで発展。猟銃を手にした大勢のハンターが入山したが、成果はさっぱりだった。

京大グループの生態調査

大分市長に就任した保がこの野生ザルに関心を示したのは、「京都大学の研究グループが高崎山に生息する野生ザルの生態調査を始めた」という新聞記事を目にしてからだ。

調査を始めたのは、当時、京大人文科学研究所員だった今西錦司や京大理学部動物学科の学生伊谷純一郎らで、第一回調査は二十五年四月十三日から八日間にわたって実施された。

京大助教授時代の伊谷純一郎

〈伊谷純一郎は大正十五年五月九日、鳥取市に生まれる。父賢蔵は画家。少年時代を京

都で過ごした。京大理学部卒業後、大学院へ。昭和三十一年日本モンキーセンターの専任研究員、三十七年京大理学部助教授、五十六年同教授、平成二年同名誉教授に。この間、高崎山のニホンザルの群れをえづけと個体識別というユニークな研究方法で調査。群れの内部構造や音声の分析によるコミュニケーションを解明し、サル社会についての独創的な理論を確立した。また三十三年から約三十年間にわたってアフリカ大陸の野生ゴリラと野生チンパンジーの調査も続け、それまでの通説を否定する生態を次々に明らかにした。こうした霊長類研究の業績が認められて五十九年、人類学のノーベル賞といわれる英国ハクスリー記念賞受賞。京大霊長類研究所やアフリカ地域研究センターを創設している。平成十三年八月十九日、肺炎のため、京都市内の病院で死去。七十五歳〉

その頃の保にとって、高崎山は南北朝時代に大友家が頂上に築いた〝城山〟という概念しかなかった。

〈高崎山の頂上に軍城を築いたのは、大友家八代の氏時（十四世紀）。当時の九州は南北朝動乱の真っただ中にあった。氏時は足利尊氏が率いる北朝側についたため、高崎山城は南朝側の懐良親王軍四万の軍勢に攻め入れられた。これに大友軍二万が迎え撃ち、親王軍を撃退する。現在、高崎山城は廃墟と化し、往事を偲ぶよすがもない〉

京大研究グループによる高崎山・野生ザルの第一回調査の概

要「高崎山の猿」が二十五年十一月五日付の大分合同新聞に記載され、これがまた俄然、保の興味をそそった。筆者は先に紹介した伊谷純一郎。

「確認された野生ザルは百八十四匹で、サル社会は一種の権力社会またはボス社会になっている。植物、果実などのエサを求めて集団移動をし、音声は威かく、警戒、伝達などを目的にした二十数種に分類することができる。高崎山の生きた標本であり、観光資源として保護したい」という内容。保は特に締めくくりの文章「観光資源として保護したい」に注目した。

コイ集めがヒントに

どんな手法で高崎山の野生ザルを観光資源に結びつけるか。保の〝苦吟〟が始まる。自宅の風呂につかりながら思案にくれていたとき、ふと、親友の日本画家福田平八郎から聞いた話を思い出した。

彼はあの傑作「鯉」（大正十年作）を描いた際、南禅寺や大極殿の池のコイを写生して下書きにしたと言っていたな。確か、手をたたいてコイを集めたとも言っていたぞ。これがヒントになって一瞬、あるアイデアがひらめいた。

「コイにエサを与えるとき、手をたたく。これを繰り返すと、手をたたくだけでコイが集まってくる。この手法を野生ザルに応用すれば、えづけが可能になり、観光用に利用できるのではないか。もしこれが成功したら、果実、野菜荒らしも一挙に解決し、まさに〝一石二鳥〟」。こ、これだ。

跳び上がらんばかりの保はこのアイデアを日記帳にメモしようと、体もろくにふかず、下半身をバスタオルで覆ったまま、浴室から書斎に走り込み、美苗を驚かせた。この条件反射の手法は、後に生態水族館「マリーンパレス」でのイシダイにも応用し、〝魚の曲芸〟を成功させる。

大西和尚に協力要請

翌日、保は若い秘書の辛島公一郎（後の市消防長）を伴い、高崎山麓の万寿寺別院を訪れた。応対したのは大西真応（しんおう）和尚である。

〈大分市金池町にある臨済宗・妙心寺派の万寿寺は大分屈指の名刹。嘉元三年（一三〇五）、大友五代の出羽守貞親公が博多・承天寺住職の直翁智侃禅師を招いて開山した。建立当時は現在の大分市元町にあったが、天正十四年（一五八六）、豊後へ侵入した薩摩の島津軍に焼き打ちに遭って焼失。寛永十年（一六三三）、当時の丹山禅師が現在地に再興した。別院は昭和十三年、奥大節老師が道場として建立した〉

戒壇寺住職の大西真応
（戒壇寺提供）

〈大西真応は明治四十五年六月十一日、福岡県田川町（当時）で生まれた。幼時に両親が死亡。二人兄弟。

兄は北海道へ、真応は久留米町（当時）の叔母に引き取られ、四歳で高知県中村市の臨済宗・妙心寺派太平寺に預けられて少年時代を過ごした。十八歳のときに修道僧として万寿寺へ。昭和三十一年三月、福岡県太宰府市の同宗・妙心寺派戒壇寺の住職となり、六十二年十二月二十六日、七十五歳でこの世を去る。博覧強記。器用貧乏なところがあり、硯箱などの調度品も自分で作った。精進料理は天下一品。後輩の面倒見がよく、慕われた〉

万寿寺別院

初対面の二人は、別院道場の禅堂の隣に新築されたばかりの侍者寮で対座した。大西和尚は小柄だが、大きな才槌（さいづち）頭。目はくりくりして愛嬌がある。保の方から切り出した。

「上田です。和尚はなんでもご自分で作ると聞いていますが…」

「アハハハ…、最近は新式のネズミ取り器を考案して喜ばれました。サルが道場をいたずらするときには、撃退する吹き矢もこしらえましたよ」

「そのサルですが、道場の周りにやってきますか」

「ええ、道場上の岩尾根周辺がねぐらになっているようですね」

「その高崎山の野生ザルにえづけをして観光資源にしようと考えていますが、協力していただけますか」

「えっ？」

大西和尚のどんぐり眼が一段と大きくなり、保の来訪の目的を理解した。

ちょうど〝猟銃で果実、野菜を荒らすサル退治〟という世論が高まっている折だけに、サルの行方を心配していた和尚は保の共存共栄論に賛同し、即座にえづけに協力すると約束した。和尚は無類の動物好きで、野放しの野良犬、野良猫の子を拾ってきては飼っている。

保らは大西和尚に誘われて、道場の一番奥にある隠寮の庭に立ってみた。ようやく日が傾きかけ、周辺に茂る森林の枝のすき間から西日が差し込んでくる。一段と高い枝に止まり、じっとこちらを見つめている大きなサルがシルエットのように保の目に映った。

「あれは偵察隊のオスザルですよ。さっきから私たちを警戒していますね」と大西和尚。そして、彼は突然、パーン、パーンと二度両手をたたいた。

「クワン、クワン」と鋭い声を残してその偵察ザルが跳び上がるようにして茂みに姿を消すと、「ガガガガガ…」「ギャー、ギャー」などの悲鳴に近い声が一斉にこだまし、サルの群れは一斉に森林の中を大急ぎで移動した。

保は野生ザルが人間に興味を示しているのを直に目撃し、えづけの成功を確信する。

えづけ開始

二十七年十一月二十六日午前九時、保はリンゴを六箱と大量のサツマイモを別院に運び込み、大西和尚とともにサル寄せを開始した。多くの市民や報道記者たちが見守る中、保と大西和尚は庭や岩の上にリンゴ、輪切りのサツマイモを置いて回ったが、野生ザルの方は一匹も姿を見せなかった。

保にじゃれ付く野生ザル

記者団に囲まれた保は「こんなに大勢の人が集まったので、サルの方が警戒したのでしょう。手をたたく代わりにホラ貝を吹いて集めたい」と語った。

翌日からは、大西和尚が一人でえづけを続けることになり、決まった時間に根気よくホラ貝を吹いてはリンゴとサツマイモを置いて回った。

数日たってからサルの群れが森林から降りてくるようになり、さいの目に切ったサツマイモだけを拾っていき、リンゴには見向きもしない。このサル寄せの話題は連日のようにマスコミをにぎわせた。

この間、保は中央市場から取り寄せたホラ貝を持参して別院に行き、大勢の報道陣の前で力いっぱい吹いてみせたが、今度もサルは一匹も現れなかった。このため、マスコミは「市長、

大ボラを吹く」とはやしたてた。それでもご当人はご満悦だった。サル寄せならぬ〝マスコミ寄せ〟だったから。

初代ボスザル、ジュピター

大分中学時代の同期生で正月休みに帰省していた某親友を保は別院のサル寄せ場へ連れて行った。ちょうど、サルの群れが下山していた。保がサルの好物であるミカンを道場の庭に投げようとしたとき、群れの中からひときわ大きい一匹の雄ザルが近づいてきた。

強靭な筋肉質で精悍な相貌。目は鋭く、股間に赤くて太い睾丸をぶら下げている。

保が放り投げたミカンを拾いムシャムシャ食べ終わった後、十数匹の雌ザルと子ザルを引き連れてゆうゆうと灌木の茂みへ消えていった。

初代ボスザル、ジュピター（大分市観光協会提供）

保は「あれが初代ボスザルのジュピターだよ。貫禄があるね。それにしても見事なキンタマだな」と笑った。親友も誘われるように大笑いした。

折しも、上田市

政は財政難の打開策として職員の定員削減案を打ち出し、市職員労組と団交中だった。市長室では連日、削減案の撤回を求め、約百人の職員がムシロを敷いて座り込みを強行し、険悪な空気の中で交渉が続いている。

団交の席上、鼻のとがった執行委員が青筋を立てながら、「市長、われわれの子どもにはろくにリンゴを食べさせられないのに、公金を使ってサルに食べさせるとは何事だ。そんな予算があるのなら定員削減を撤回しろ」とまくしたてた。いつも教条主義の建前論を振りかざすこの執行委員は、保の最も嫌なタイプ。

短気な保だけに、通常ならどなり返すところだが、その朝は万寿寺別院の大西和尚から電話で「えづけが成功した」という連絡があり、心のゆとりができている。

彼は「財政難だからこそ、野生ザルのえづけを成功させて高崎山を観光名所にしようと試みている。収入が得られるようになれば、財政を潤すことになり、定員削減などはしない」と切り返し、〝青筋〟氏を黙らせる一幕もあった。

観光名所の誕生

職員の定員五百十二人を四百四十二人に減らすのを骨子とする定数条例改正案は市議会で原案通り可決。新年度から実施された。

大西和尚の協力でサル寄せが軌道に乗ったため、大分市は万寿寺別院のサル寄せ場の入園料徴収を二十八年三月十五日から

開始した。保の発案で「小人十円、大人は小人並み」の看板を掲げ、これがまた話題となった。

九月に高崎山一帯が阿蘇国立公園に編入され、名称も「高崎山自然動物園」と決まった。十一月には野生ザルが天然記念物に指定された。こうして、観光に縁遠かった大分市に本格的な観光名所が誕生する。

野生ザルの新名所は評判を呼び、入園客は日毎に増える一方。まさに〝順風満帆〟のスタートだったが、思わぬ難問がふりかかる。

えさをまく保（立っている人物）と職員たち（昭和二十八年三月）

万寿寺と協議

二十九年二月、万寿寺の奥大節老師と門下代表らが大分市役所の市長室を訪ね、保に「別院本堂を建設したいので、サル寄せ場を別院の外へ移してほしい」と申し入れたからだ。

〈奥大節は明治二十二年、島根県平田市生まれ。八歳で得度し、京

奥大節老師

都・天龍寺で二十三年間修行後、大正十年に副住職として万寿寺に迎えられた。同十五年、静岡県の臨済宗の方広寺本山方広寺管長に転出した足利紫山老師の後を継いで住職に就任。昭和二十一年に方広寺管長に就任。二十六年、再度万寿寺に帰山。三十五年に再び方広寺管長に就任。四十五年、八十一歳で遷化〉

市側と万寿寺側は話し合いの結果、①サル寄せ場は現在地で続け、万寿寺側はこれに協力する②別院の損害を補償するため、年間総売上の二〇％を万寿寺に寄付する（後に寄進料と呼ばれる）などで歩み寄り、一応けりがついた。この寄進料をめぐって、以降も双方で協議が続く。

「ただいま零匹」

映画撮影中の佐野周二、日野葦平、保（左から）

上田市長をモデルにした「ただいま零匹」が朝日新聞夕刊の昭和三十年（一九五五）十一月二十日付から掲載された。翌三十一年四月二十二日付まで百五十回続いた。

〈著者は火野葦平。本名玉井勝則。現在の北九州市若松区生まれ。早大

英文科中退。応召中の昭和十二年、「糞尿譚」で第六回芥川賞受賞。「麦と兵隊」「土と兵隊」「花と兵隊」など戦争小説で一躍人気作家へ。出世作「花と竜」で認められ、「ただいま零匹」の執筆となった。三十五年一月二十四日、若松区の河伯洞書斎で睡眠薬自殺した。五十二歳〉

「ただいま零匹」の主人公、園部市長はサル寄せに成功したり、キリシタン博物館の実現に奔走するなど一応、史実に基づいてはいるが、この主人公は恋愛もする情熱家として描かれ、パロディー化されている。このため、保は与党議員たちから「市長はモテるんですね。すみにおけないですな」とひやかされた。

出来はともかく、この作品で高崎山の野生ザルと保は全国に知れわたり、映画化もされた。藤原杉雄監督、佐野周二、岡田茉莉子主演で、大分、別府両市を中心にしたロケは三十二年八月に行われた。

このときのエキストラにかなりの大分市職員が動員され、この中に、若い職員、姫野太之がいた。以前に紹介したように彼は上田市長の元で財政課長、後の佐藤市政の助役を務める。

天皇、皇后両陛下を歓迎

三十三年四月、別府市志高湖畔で開かれた第九回植樹祭出席のため大分県入りされた天皇、皇后両陛下が県内視察最終日の九日、高崎山自然動物園に立ち寄られた。

保の先導でサル寄せ場にお着きになったお二人に二百五十匹

のサルが歓迎。数匹のサルが両陛下の前でピョコンと柵の上に座り、ラッカセイをおねだり。突然、一匹の若者ザルがじゃれるように皇后さまの肩に飛び乗ったため、驚かれた皇后さまは声を上げられた。皇后さまの肩から柵に飛び降りたサルに皇后さまは思わずニッコリ。

一瞬、ドキリとした保やお供の木下郁大分県知事らは安堵するとともに、笑い声がこぼれ、なごやかな雰囲気に。保の人生にとっては、最も印象深い晴れの舞台だった。

高崎山自然動物園は、人間と野生ザルとの共存を実証した。さらに財政を潤す〝ドル箱〟的な存在となり、全国の自治体が観光行政に力を入れる先駆けともなった。

サル寄せ場に立ち寄られた天皇、皇后両陛下
（昭和 33 年）

オオイタデジタルブック

オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたいと願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「ロマンを追って」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！！

大分合同新聞社　NAN-NAN　別府大学

著者略歴◇中川　郁二

一九三七年生まれ、別府市出身。福岡県立修猷館高、早稲田大学卒。民間企業勤務を経て、大分合同新聞社入社。報道部次長、別府支社編集部長、読者情報部長、論説委員、編集委員。

デジタル版「ロマンを追って―元大分市長上田保物語―」　第九章●「条件反射」

2008 年 5 月 9 日初版発行

著者　中川　郁二

原著　2003 年 2 月 15 日発行／発行：大分合同新聞社／製作：大分合同新聞社文化センター／印刷：佐伯印刷

《デジタル版》

編集　大分合同新聞社

制作　別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行　NAN-NAN 事務局　（〒 870-8605 大分市府内町 3-9-15 大分合同新聞社　総合企画部内）

© 大分合同新聞社